思想・文化情況の〈現在形〉を読む
創刊 1999年12月01日

La Vue ラ・ヴュー

No.13（2003/04/01号）

発行人:山本繁樹
発行所:るな工房／黒猫房／窓月書房
大阪市東淀川区菅原7-5-23-702 〒533-0022
TEL/FAX 06-6320-6426
http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/index.html
E-mail:YIJ00302@nifty.ne.jp

目　次

◆たちあがる ことば……寺田　操
◆贈ることの宇宙 ……小原まさる
◆美って何なんだ〜？……ひるます
◆アカデミズム再考
——三十数年ぶりに大学生になって思い直すこと …元　正章
◆わかるということ……ある数学の体験
……加藤正太郎
◆編集後記

No.14は2003 / 08 / 01発行予定です。

■無断転載を禁じます■

言葉と朗読

たちあがる ことば

寺田　操

空前の朗読ブームらしい。斉藤孝『声に出して読みたい日本語』が爆発的に売れたり、小学生に日本語朗読を教える「斎藤メソッド」なども話題に上がっている。だが、周囲を見渡してみて朗読会などに出かける人はまれだし、朗読の会などが行われていることも、それほど頻繁ではない。もちろん情報が入っていないこともあるだろう。ポエトリー・リーディングなどは、ずいぶん昔から音楽とのコラボレーションなどの創意工夫をこらした案内をいただくこともあったが、出かけるのは億劫だった。

また、朗読を聴くのも朗読をするのも苦手だというと、たいていは、朗読否定論かな？ 朗読批判かな？ というような反応がかえってくる。しかし、私は、けっして朗読が嫌いなわけではない。むしろ、独りでいる時間や買い物へ出かける車中でラジオから聴こえる「語り」に耳を傾けるのは好きだ。とりわけ、映像と文字と朗読のコラボレーションをソファーベッドに横たわりながらぼんやりと見聴きするのは至福の時間だ。

今日、二〇〇三年一月四日午前九時すぎ、遅い食事をすませてテレビをつけるとドキュメンタリードラマ「幸田家の人々」が中村梅雀の語りで放映されていた。私はこの種の番組がとても好きで、ついつい仕事の手を止めてみてしまう。特に幸田文の文章はわりあい好きなので、この露伴、文、青木玉、奈緒と四代続く一家にはとても関心がある。露伴没後、文豪の日常周辺をスケッチしてエッセイストとしてデビューした四十歳の文の語り口は、まさしく「声に出して読みたい」と思わせるテキストである。

原田美枝子扮する文の薪割りを中村梅雀扮する露伴が手ほどきしている。なかなかうまく薪を割れない文に「渾身」を授けるシーンだ。おやっ、斎藤孝が小学生と幸田文のテキストを読んでいる。着ていたシャツを脱ぐと「渾身」と染め抜かれた文字のTシャツが現れたのには笑ってしまったが。子供たちは薪割りならぬ名刺での箸割を「渾身」をこめて実践していた。身体文化と肉声の復権を説く斎藤の音読現場だ。声と身体を美しい日本語で味わうという「斎藤メソッド」について触れると、すなわち、手放しで賛同しているのだと思われるかもしれない。朗読というメディアが切り開く「魔」の装置や怖さは承知のうえだ。死んでしまったはずの「ことば」だって朗読者の美しい「声」で蘇生することだってあるのだから。

声は身体をとらえずにはおれない「魔」を無意識に備えている。露伴・文の「ことば」がまざまざと朗読者の声を通してたちあがってくるのを聴いている私の実感だ。

「ことば」が文の現場で「たちあがる」瞬間にたちあったことは、なんどもある。一番印象に残っているのは、埴谷雄高の『死霊』を蟹江敬三が朗読した映像を見たときだった。いつも読みかけては放置している黒一色の『死霊』（講談社）一〜九章をずらりと並べ、蟹江敬三の語りをききながらページを開いて読んでいったときのことだ。耳から入ってくる声と書物の文字がひとつになり、とつぜん私の身体にしみいるように入り込んできた不思議な体験の夜のこと。読みたくて購入した書物なのに、ページを開くと呪文がかかって読めなくなっていた『死霊』。この夜、呪文がとけて、ことばが私の前に開かれた体験をした。

《青年は、広い柱廊風な玄関の敷石を昇りかけて、ふと立ち止った。人影もなく静謐な寂寥たる構内へ澄んだ響きをたてて、高い塔の頂上にある古風な大時計が時を打ちはじめた。青年は凝っと塔を眺めあげた。その大時計はかなり風変りなものであった。石造の四角な枠に囲まれた大時計の文字盤には、ラテン数字

毛皮と人間の歴史
西村三郎　毛皮をめぐる人間の長い歴史と壮大なドラマを地球的・人類史的視野で考察。大佛次郎賞作家渾身の遺作。◆2800円

シバの女王
砂に埋もれた古代王国の謎
N.クラップ／矢島文夫監修、柴田裕之訳 中東を舞台に、キリスト教・イスラム教の史実や民間伝承等、あまたのシバ像をたどる考古学者の壮大な旅 ◆2800円

視覚の文法
脳が物を見る法則
D.D.ホフマン／原淳子、望月弘子訳　〈見る〉という日常的な行為の裏側に隠されていた驚くべき法則を探りだし、豊かな視覚世界の謎に迫る。 ◆3200円

モラル・ハラスメントが人も会社もダメにする
M=F.イルゴイエンヌ／高野優訳 職場における嫌がらせ、不当なリストラ。人間関係につぶされないための必読書。 ◆2000円

紀伊國屋書店
出版部：東京都渋谷区東3-13-11
営業tel03（5469）5918 表示価は税別
http://www.kinokuniya.co.jp

中味のない人間
●ジョルジョ・アガンペン
岡田温司／岡部宗吉／多賀健太郎訳　驚嘆の処女作！ ここには生・政治と芸術を不可分に論じる著者の全てがある。 2400円＋税

ミレー《晩鐘》の悲劇的神話
●サルバドール・ダリ
―「パラノイア的＝批判的」解釈　鈴木雅雄訳　狂気よ、語れ――天オダリ、唯一無比の絵画論。奇書中の奇書！ 2800円＋税

人文書院
〒612-8447 京都市伏見区竹田西内畑町9
TEL：075-603-1344　FAX：075-603-1814
http://www.jimbunshoin.co.jp/

竹田の子守唄―名曲に隠された真実―
藤田　正著　日本近代最初の「女性の労働歌」としての子守唄、60年代から70年代のフォーク・ブーム秘史……歴史的名作に込められた熱い「思い」とは何か。CD付き・2200円＋税

ホルモン奉行（カラーグラビア付）
角岡信彦著　ホルモンたずねて三千里!! 日本列島はもちろんのこと、アジア、ヨーロッパ、世界各国をまたにかけた、うまくて熱いルポルタージュ。読めば、必ず食べたくなる。予価1800円

解放出版社
大阪市浪速区久保吉1-6-12
TEL:06-6561-5273 FAX:06-6568-7166
東京都千代田区神保町1-9
TEL:03-3291-7586 FAX:03-3293-1706
http//:www.kaihou-s.com

近世「食い倒れ」考　渡邊忠司
「食い倒れ」という諺を通して、天下の賄所と言われた江戸時代大坂の相対的位置を探る。 ■2000円〒310

湖の風回廊　近江の文学風景
西本梛枝　近江の自然と風土にじかに触れて深く味わう文学作品25編。カラー版「文学の風景」。 ■2000円〒340

ぼくが海からもらったもの①
井上慎也フォトエッセイ　毎日新聞好評連載中。オールカラーの海洋写真を添えて、全28話を収録した。 ■1500円〒340

仏教書と大阪の本の専門書店
四天王寺書林
＊小社直営。TEL06-6779-9531
【東方出版】＜税抜＞
〒543-0052 大阪市天王寺区大道1-8-15
TEL06-6779-9571　FAX06-6779-9573

ナカニシヤ出版
異議あり！ 生命・環境倫理学
たちまち第3刷！
「クローン」反対論から「エコ」のウラ側まで。ええかっこしいの応用倫理学に喝!! どこかヘンなこの「学問」を徹底批判。
岡本裕一朗著　2600円＋税
―好評発売中
京大退官記念講演＆哲学エッセイ
見えてきた 近未来／哲学
●私の最終講義
加藤尚武著　1800円＋税
〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
☎075-751-1211　FAX:075-751-2665
http://www.nakanishiya.co.jp/

でなく、一種の絵模様が描かれていた。注意深く観察してみるならば、それは東洋に於ける優れた時の象徴――十二支の獣の形をとっていることが明らかになった。青年は暫くその異風な大時計を眺めたのち、玄関から廊下へすり抜けて行った。》（『死霊Ⅰ　1～3章』）

青年・三輪与志が見上げた古風な大時計を私自身の「声」で朗読してみる。観念的、難解と評されてきた埴谷雄高が「朗読」によって身近になった気がした。埴谷雄高のテキストは、文章全体がかぎりなく話体に近い語り口であることに気づかされる。いや埴谷ファンの怒りを買うことを承知でいうなら、意外と劇画タッチだったことだ。もっともこれは、あくまでも私個人の心的・身的な体験に過ぎない。その後『死霊』はもとの本棚に納められ、ときどき気まぐれにページが開かれるだけになってしまった……が。いまでは私がパソコンを打つ背後の本棚で、ひっそりと息をとめて君臨している。

いま、再度『死霊　九章』を取り出して無作為にページを開いてみた箇所には、

《――こちらはあちらとつながっておりますけれども、そのあちらはこちらとつながっておりません……。

と、虫でも鳴くように低く述べた。

――ほう、というと、どういうことになるのかな……？

見る見る裡に、さらに好奇に充ちた生気を帯びてその声を高めた津田老人は、陰気そうな相手を間近かからよりはっきりと覗きこむふうに、相手の正面に腰かけながら、訊き返した。

――こちらでは、いま、ここ、にこのような重さの服を着て、かしこまっていなければなりませんけど、あちらでは、その必要はございません。というのも、あちらの入口には、こう書いてありますので――汝、重さをもつことあらざるべし、と。

――ほほう――汝、重さをもつことあらざるべし、とそこの入口に記してあるのかな。》

この開いたページを私は「ほほう」と津田老人が独り言でもいうように喋りながらパソコンに打ち込んでいる。作者の語り口が私の唇と重なりあってきたとき、私自身が朗読者になる。こうした体験は、ひっそりと行われるのがよい。

私はいつからか自身の読書に関して気づいたことがある。それは、書物を黙読しているのだが、いつも声にならないかすかな声で小さくつぶやくように朗読していることを。

詩集『モアイ』をだした十年くらい前のことになるが、小さな喫茶店を借り切っての朗読会に声をかけていただいたことがあった。そのとき生の声をきいていただくのが恥ずかしくて音楽テープを持参して、エリック・サティを流しランボーを紹介しながら、

《もう秋か。――それにしても、何故に、永遠の太陽を惜むのか、俺たちはきよらかな光の発見に心ざす身ではないのか、――季節の上に死滅する人々からは遠く離れて。》

と、小林秀雄訳を朗読し、自作詩の朗読も体験した。朗読をはじめると人の姿は忽然と消え、朗読する私を囲む無数の眼差し、無数の耳が迫ってくるような、実に怖い体験に遭遇した。読み手である私の顔も姿も消えて「声」だけが立ちあがればよいのだが、そうはならない。私の全身が晒されているという恐怖だけが立ちあがる。そうした幻覚だけが原因ではないのだが、「朗読会」といったパフォーマンスをする場所へでかけていき、他者の朗読を聴いたり自身が朗読するのは、やはり苦手でなるべくならやりたくない。というのが、朗読に対する極めて個人的な恐怖の感情だ。

とはいえ、パーティーでのおきまりのスピーチなどは得意ではないので、詩や短篇小説のさわりを朗読することもあるから、ずいぶん勝手なものだ。また、講演など声をかけていただいて詩や詩人、作家の話をするときには、当然、話の中で詩や小説を朗読しながら進めていかなければならない。話の流れのなかでの「朗読」にはさほど抵抗がないから不思議だ。

また、ときには、あらかじめとりあげる詩などをコピーして資料を渡し、来られているかたにお願いしてその場所から朗読していただくこともある。朗読の上手な方がその場に来てくださっているときには、予告なしに即興で朗読をお願いする。本当に迷惑きわまりないことだと思うのだが。

一月六日午後六時二十八分。コトコトとFAXが入ってきた。「白石かずこポエトリー・リーディング～浮遊する母、都市～」（ブックセラーアムズ）の緊急企画案内である。白石かずこ……たった一冊持っている『火の眼をした男』が、本棚でおいでよ、おいでと合図している。でも、やはり、出かけるのはよそう。

詩を書く時間、自分のいまの声をことばとしてたちあがらせるために、たった独りで朗読をする。それがいまの私の朗読スタイルだ。つぶやくような声で自分の詩を読みながら推敲していく。こうした作業をしている詩人や作家は少なくないと思う。そのとき、私であって私でないポリフォニックな声が「詩のことば」としてたちあがってくる気配に少し興奮する。

■プロフィール（てらだ・そう）詩人。編集として「幻想・怪奇・ミステリーの館」（エピュイ23）。詩集『みずごよみ』『モアイ』、評論『恋愛の解剖学』『金子みすゞと尾崎翠――一九二〇・三〇年代の詩人たち』。『野溝七生子の世界』『海辺の妖精たち――尾崎翠と金子みすゞ』など、一九二〇・三〇年代論を再考中。月刊「大阪人」（二〇〇三年三月号～七月号）にて「安井仲治と小野十三郎」連載中。

金子みすゞと尾崎翠
一九二〇・三〇年代の詩人たち
寺田　操著
四六判・254頁・定価2000円＋税
二〇〇三年四月、生誕百年を迎える金子みすゞと、「第七官界彷徨」などの幻想世界を紡ぐ尾崎翠。大正末～昭和初期に活躍した同時代の中原中也、宮沢賢治、尾形亀之助、北園克衛など十二人の詩人たちで紡ぐモダニズム詩人論。
白地社
〒606-8383 京都市左京区二条通り川端東入る
新先斗町133 サンシャイン鴨川501
TEL:075-751-7879　FAX:075-751-7519

文化人類学

贈ることの宇宙

ポトラッチについて

小原まさる

1　ポトラッチパーティー

アメリカの大学でポトラッチパーティーというものがあった。各家庭で作った手料理を持ち寄って留学生を歓迎するものであった。このポトラッチ（註1）という言葉は、言うまでもなく先住民の儀式から持ってきた名称である。しかし、アメリカ北西部沿岸の先住民の文化の中でも、このポトラッチという行為ほど西欧の思考にインパクトを与えたものはないのではなかろうか。

ル・モースの『贈与論』が最も有名な著作であることは周知の通りであるが（当然ながらデュルケームやマリノフスキーの研究も忘れてはならない）、バタイユそしてボードリヤール、さらにはデリダへと語られ続けて行くのである。なぜ、これほどの多くの言説が生まれてきたのだろうか。現実には、ポトラッチという行為は、植民地の政府によって抑圧の対象となってきたのであり、言わば理解しがたい行為として扱われた歴史を持っている。にもかかわらず（あるいは、であるが故に）、ポトラッチは、様々な解釈を生み続けるのである。つまりは、西欧社会の各時代の知的関心事の変化につれて、姿を変えて捉えられ、語られていくのである。その意味からすれば、それぞれの人類学者等の見解は、それぞれの立場による限界性を持っている。その限界性故に、かれらは語るのだとも言えるだろう。彼らは、自己の文化との差異に出合ったのであり、ある種のとまどいが語らせるのであろう。したがって、こうした西欧の哲学者や人類学者の言説を検討することは、西欧の思考が、どのようにこの行為を見てきたのか、そして逆に言えば、彼らが、

そこで何を発見したのか、そして何を発見し得る思考を持っていたのかを知ることにもなるわけである。

たとえば『贈与論』という本が、今日どのようなキャッチフレーズによって売り出されているのかを見ることは、このことを考える場合に参考になるだろう。一つの解釈は、得ることより与えるということが重要に見えるこの行為を、若干の無理があっても反対贈与とともに交換の原始的な形として考えることである。そして、同時にこの交換を、酒を酌み交わしたり、お祝いのプレゼントを贈るときのように、人間関係を維持するためのコミュニケーションの手段として捉え、そこに意味を見いだすものである。このような見方は確かに贈与という行為を身近なものとして理解することを容易にするものである。

しかし、モースの「贈与」や「全体的給付」の概念は、いわゆる経済的な交換とは別のものを、つまりはモースのある種の驚きを表現した概念であったと思う。これは従来の概念では説明できない問題に直面することで生み出された新しい概念であったと言えるのである。つまりモースにとって、この贈与とは近代的な経済の原型となるものではなかった。そればかりでなく、特定の対象への贈り物という性格のものでもなかったのである。モースは、贈与の持つ、いわゆる近代社会での経済的な交換や贈り物以外の特徴に注意を向けようとしたのである。

これに対してレヴィ＝ストロースの理論は、記号の交換の理論である。モースが、ポトラッチのような行為を「贈与」という概念で説明しようとしたのに対し、レヴィ＝ストロースは、「記号」という概念を使って贈与を含む人の行為を説明しようとしたのだと思う。逆に言えば、交換の概念を、記号という、より一般的な概念によって、さらに拡大して見せたことになる。この作業は、記号が一義的ではなく、多義的なものであるという考え方によって、また、記号は矛盾したものを表現することができるという考え方によって可能となる。これによって「贈与」は、広い意味での交換の概念に飲み込まれてしまったとも言えよう。

だが何故記号はそのような機能を持つことができるのであろうか。レヴィ＝ストロースは、神話の構造や婚姻の仕組みが言語のような体系を持ち、それによって複雑なコミュニケーションの機能を持っていると考えた。しかし、これらの構造は意識されているわけではないので、当事者にはその全貌はわからない。言葉を話す人が、言語の構造を意識して話しているわけではないのと同じである。だが彼によれば人類学者にはその構造が見えるのだ。いずれにせよ、重要なのは記号が体系と体系を接続することである。そう考えれば、贈与という行為は、体系と体系との間の記号の交換として説明できるし、その意味での記号という概念によって、より幅広い対象についての説明が可能になる。言いかえれば、交換理論は、こうしてその守備範囲を拡大するのである。レヴィ＝ストロースは、「交換」のイメージと言語学の理論から、記号と構造という概念をもたらしたのだと思う。それは『贈与論』のモチーフの拡大であるとも言えるが、全く性格の違うものである。

2　記号と死

レヴィ＝ストロースによって示される「一般交換」の概念は、マリノフスキーによって説明された「クラ」(註2)や、モースによって引用されたマリオ族の「タオンガ」(註3)ように、人から人へ、集団から集団へと送られる贈与物のイメージを利用しつつ、記号の交換による集団間のコミュニケーションの理論の根拠となる概念として定義されているように思う。モースが直面したのと同様の問題、(非近代的という意味で)非経済的で非個人的な交換らしき行為を、これらの概念によって、つまり記号によるシステムの連鎖によって説明したことになる。そして、これは社会集団の中での人々の他の行為を説明することのできる理論として一般化されるのである。トーテミズムもまた、本来は自然界の系列と人間社会の系列との関係付けの論理によって生まれたものとして説明されるわけである。しかし、モースが強調したポトラッチの破壊について、レヴィ＝ストロースは、その行為の目的を「膨大な財産の証明」(仮面の道)であるとしているものの、あまり言及しようとしてはいないように思う。構造と記号の交換といった概念によるコミュニケーションの理論では、このことを説明するのが困難だったのではないだろうか。

逆に、この破壊的な性格を積極的に採り上げたのは、周知の通りバタイユであった。バタイユの見方は、ポトラッチの特性を「交換」という点よりも、「破壊」という点から捉えている点で、注目すべきである。確かにポトラッチにおける銅板等の破壊は、しばしばポトラッチの特徴ある行為として語られてきた。しかし、モースによって指摘されたポトラッチに含まれる「破壊」という命題は、バタイユによってこそ直視されたと言えるだろう。何故、破壊は贈与と同じ場面でなされる行為なのか。これはポトラッチにおける最も重要な点であると思う。しかも、バタイユはむしろ破壊の方に注目する。もし仮にレヴィ＝ストロースの流儀で、これをコミュニケーションの観点から見ると、ポトラッチは、言わば無のコミュニケーションであり、無の交換であることになる。それでも関係性の中で把握しようとすれば、その行為は、関係性の切断という記号であり、本来の記号の役割とは逆であろう。したがって、レヴィ＝ストロースの思考が捉える交換の概念では説明されないものとなってしまうのである。

モースは、「破壊」の目的は「贈与」であると言ったのであり、彼にとってそれは、経済的な交換でも、富の誇示でもない。それはおそらく、ボードリヤールがモースの思考の中に発見した「価値の彼岸」を示すものであるかも知れない。贈与の破壊的な性格とその意味は、レヴィ＝ストロースの解釈によって見えなくなっていたものであり、しかしモースには見えていたことなのである。リオタールの見方を参考にすれば、レヴィ＝ストロースの言説は、異質な思考から距離を置き、自らの言葉で語ることのできる地点まで撤退して、なお語ろうとする運動に支えられているとも言える。そして、見いだされた「具体の科学」という科学の変種は、いずれ真の科学的思考へと取り込まれる宿命をおっているかのように語られるのである。仮に「野生の思考」という名称が、人類学者として異文化への最大限の敬意を込めたものであったとしても、科学的思考による知の統合の素材となってしまっているように見えることには変わりがないのである。異なる宇宙観や生命観を持つ思考を前に、自らの限界を直視するより、迂回しながら結局は自己の思考を語る言説へと回帰する状況を見て取ることができるとも言えるだろう。結果的に彼は、「野生の思考」を擁護しようとして逆に近代的思考を押し付けてしまったのではないだろうか。しかし、そのような統合への意志を別にしても、いったい何から距離を置き、何が迂回され避けられてきたのだろうか。

結局のところ、贈与の問題は、われわれを「死」のテーマに連れ戻すのであり、それこそが避けるべき問題だったと言うことができると思う。だからこそ、デリダは『与えられた時』や『死の贈与』によって、ボードリヤールは『象徴交換と死』によって、贈与と死を語るのである。ボードリヤールによれば、西欧の社会は「死を脱社会化」してしまった。しかし、非西欧的社会は死を社会的に取り込んでいる、あるいは生活の中に取り込んでいる。言わば思考そのものが、死を中心に構成されていると言ってもよい。そして、こうした思考においては、「存在はたまたまわれわれに帰属しているにすぎない」のである。これに対して西欧には、哲学や宗教があらかじめ死を引き受けることで、(哲学的な死が、残された人々に人間的な真理の世界をもたらすという形で)人々を言わば生の世界に閉じこめる思考が存在するわけである。その結果もたらされる世界は、バタイユがコジェーブのヘーゲル読解の中に見出したように、人間の中の自然(動物)を追い出すことで生み出された人間的な生の世界なのである。

だが、死を排除しない思考とは、どういうものであろうか。逆説的な言い方になるが、それは生命の連鎖の思想である。ポトラッチの舞台となるアメリカ北西部沿岸地域の先住民の世界観に、その端的なものを見ることができると思う。この世界観では、それぞれの生命は、それ自身の中に他の生命を宿していて、その生命もまた他の命へと連鎖的に変身する(生まれかわる)定めの中にある。新たな命は、元々それぞれの生命が内包しているものである。一個の生き物は、すでに生命の複合体である。この考え方は、彼らの芸術に端的に表現されているものであると思う。彼らの描く動物の絵(次頁図)の体内には、幾つかの別の命を見ることができる(動物の中には他

玄　語

日本における知識工学の先駆的業績

A4判・総頁数876頁・上下2巻(CD-ROM付属)・
セット価格7000円（税込）・三浦梅園資料館刊

江戸中期の思想家三浦梅園の著作『玄語』の訓読編。現代にも通じるハイパー的階層構造を持つ梅園の主著をその思想に即して玄語図と共に再現。『玄語』研究の第一人者、北林達也氏編集による画期的労作。

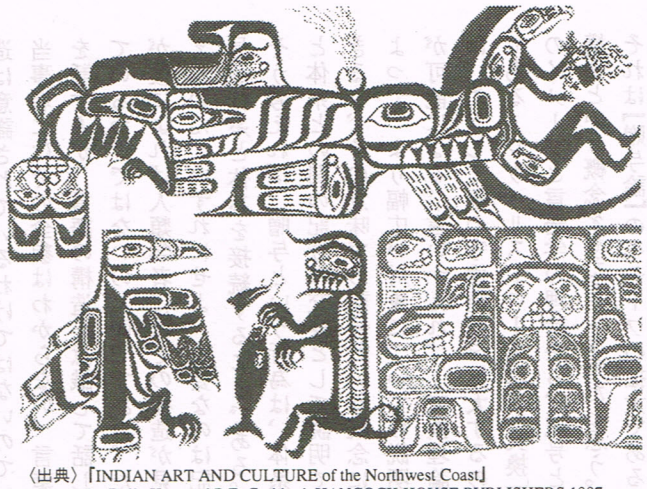
梅園資料館
〒873-0355 大分県東国東郡安岐町大字富清2507-1
TEL:0978-64-6311 FAX:0978-64-6310
http://www.coara.or.jp/~baika/（北林氏のHPで紹介）

の動物と隣あって人も埋め込まれ、人の中には幾つもの動物が埋め込まれている）。一つの生命体は、たくさんの命の器が詰め込まれ、すき間なく組み合わされた複合体である（実はこうした思考は、私たちにも身近なものだ。たとえば、宮澤賢治が「私という現象」について「透明な幽霊の複合体」と言ったことを思い出そう）。彼らの作るワタリガラスの仮面は人の顔をその内側に持っており、仮面自身がさらなる仮面を内包しているのである（残念ながら構造主義の影響からか、こうした造形芸術を主に図形的なパーツに分解して分析する研究がなされてきたようである）。

この世界観では、ある生き物が命を全うすることは、その生き物の内部に存在する（時には多くの）別の命を解放することになる。だから命はすぐさま誕生する。死とは、ある存在が別の姿を持つための、きっかけにすぎない。だが、それによってこそ生命の連鎖が可能になるのだ。敢えて再びレヴィ＝ストロースを持ち出すならば、彼が記号としたものは死であり無であるということになるかも知れない。命の連鎖の中では、死は排除されないどころか、死そのものが世界の連続性を維持するのである。言うまでもなく、こうした思考は万物に命が宿るとする世界観と表裏一体である。個体は初めから個体ではないということであり、それはもちろん人間だけの世界を構成するものではない。そして、トーテミズムと呼ばれることになってしまったものは、記号の体系というより、存在についてのこのような思考を表現したものだと思うのである。これは近代が生み出したもの、すなわち、純化される抽象的な自己、それと同時に構成される他者の概念、それに立脚した交換とコミュニケーションの可能性を中断させる思考でもあるのだ。

3　贈与と富

ポトラッチが、このような考え方を持つ世界観のもと行われた儀式であることを忘れてはならないと思う。ここでは、破壊的な行為と見えるものは、実は命の器を開け放つ行為だと言うべきなのである。生き物や事物はその役割を全うして初めて新たな命を持つ者として再生するのだが、同時に命はこの連鎖の中で停滞を嫌う。命はもともと宇宙を飛び交うものであるが、この自由な往来に対する妨害は所有と蓄積によって発生するのである。つまりこの世界では、所有と蓄積は不自然なことなのであり、たとえば魚を干して長期に食料として保存することでさえ、命を病んだ状態に拘束することである。これに対して、「贈る」という行為は、事物の役割を終わらせることで魂を宇宙に「返す」行為である。こうした思考はイオマンテにも通じるものであると思うが、モースがアメリカ北西部およびアジア北東部のポトラッチのすべての形態に含まれるとしたその破壊的な性格は、このような思考の存在を前提に考えれば納得できるのである。すなわちここでは、「贈る」という行為が、「破壊」という行為を通して実現されているのである。ポトラッチが「交換」と対立するのは、この点からである。なぜなら交換の前提には、



〈出典〉「INDIAN ART AND CULTURE of the Northwest Coast」
by Della Kew and P.E. Goddard, HANCOCK HOUSE PUBLISHERS,1997

個人によってであろうが集団によってであろうが、事物を固定した状態に置くことと、すなわち所有されることが必要である。そしてまた物の交換は、結果として新たな所有の状態を発生させる。しかし、「贈与」は、それが人間の集団間でなされるように見える場合でも、実際は相手の人間を対象にしているわけではない。むしろお互いに人による所有や蓄積の状態そのものを避けようとする行為なのである。誤解を恐れずに言えば、これを次のように説明できるかも知れない。われわれは天に神がいるとして神に捧げ物をするが、もし互いの人間集団が神々であれば、破壊をともなう贈与は水平になされ、命は互いに解放され合うわけである。そして、この所有を回避する行為は、競って行われることになる。しかしこれを人間同士の間の行為として受け止めてしまえば、贈与は単に浪費や、あるいは交換の一種と見えるのであり、さらには富の誇示を目的とする行為とも見なされてしまうわけである。

ポトラッチを禁止する法律が作られた時、「（ポトラッチの）熱狂の影響下では、インディアンが富を蓄えたり、勤勉になることは不可能である」とされたのも、あながち的外れな見解ではなかったことになる。まさに、先住民の族長にとっては、富を蓄えるどころか、いかに多く贈与した（いかに多くの命を宇宙に解き放った）かが、その誇りの大きさを決定したのである。だから彼らは貧しく死んでいったのだと言われている。再びボードリヤールの言葉を借りれば、それは、「存在も世界もわれわれの持ち物ではない」という思考が生み出した行為なのであり、財産の証明のための行為ではなかったのである。したがって、バタイユが、こうした思考を背景とするポトラッチを「所有」と対立するものとして捉えたのも不思議なことではない。彼にとって所有とは将来における消費・再生産を目的とした行為であり、彼は、奴隷的な経済行為に対立するものとして、徹底した消費（非生産的で無目的な消費）をポトラッチに見ようとしたのである。

実際のところ、ポトラッチの破壊的性格とその規模の拡大は、西欧人との交易によって多くの物資がもたらされてからであると言われている。日常生活で使用する以上の物の蓄積は、命の循環の流れを堰き止めることであり、ポトラッチにおける破壊は、敢えてこの堰を切る行為だったと思うのである。その意味では、ポトラッチの破壊的性格を、バタイユの言う「消尽」という概念で説明するだけでは不十分だと思う。バタイユに見えたポトラッチの過剰な消費という姿は、交易によってもたらされた膨大な富に対する拒絶反応にも似た現象だったのではないだろうか。そして富が過剰になればなるほどポトラッチも大規模なものにならざるを得なかったのではないだろうか。だからこそ、ある時期、それまでポトラッチの伝統を持たない地域にも、ポトラッチは広がって行ったのではないだろうか。繰り返しになるが、ポトラッチにおいては破壊自体が目的ではないのである。だから、贈与の破壊的な部分に着目することは重要だとしても、そればかりが強調されてはならない。命が互いに入れ子状態となって連鎖する世界では、ある存在の痛みは、他の存在においても痛みとなるからである。しかもすでに述べたように、この行為は新たな「生」のためのものなのである。

4　ここにある宇宙

命の連鎖の思考は、特別な状況下において、激しい破壊的性格を見せるわけだが、実は非常に日常的な思考ではないかと思う。なぜならそれは、この世界の現実（生と死、魂と存在）に向き合い、それらをこの地上の水準で説明しようとする思考であるからである。この思考は現実と同一平面にあろうとする。生と死は、この地上で繰り返される身近な現象である。ある事物の終わりは、今ここでの新たな命の誕生を意味するが、それは身近なところでいつも起こっていることなのだ。宇宙とはここでありそこであり、命はあっけらかんとして、そこに生まれて来る。命と命の関係は、連鎖するとは言え、さっぱりしたものだ。幾つかの神話がしばしば見せてくれるのは、このような、言わば現実界の彼岸（あの世）を想定しない世界である。そしてこれが北西沿岸部の先住民の世界観の持つ際立った特徴だと感じるのである。だがすでに述べたように、この世界には、一つだけ約束がある。それは、ある存在が新しい命に生まれかわるには、その存在は十分にその役目を終えなければならないということである。つまり、命は十分に生き尽くされねばならないのである。

贈与のもう一つの特徴は、この命の連鎖の中で、贈与もまた連鎖する性格をもっていることである。新たな命の再来、つまり春を呼ぶためには、贈り物は連鎖し増幅され世界の隅々にまで届けられねばならない。たとえば、アイヌの世界では、贈り物は神の国に届けられると、より多くの贈りものとなってさらに神々に行き渡り、それによって世界は新たな命で満たされるのである。つまり、贈与物は新たな場所で消費されることで、その命の力を増幅させるのであり、春はそのようにしてやって来るのである。同様な意味で、ポトラッチもまた、競争的な性格の中に、連鎖的、増幅的性格を持っていると言えると思う。そして、これらの連鎖は宇宙を区切ることのないものであり、もちろん人間だけの連鎖ではないのである。

これまで述べたように、「贈与」とは、物を移動させ、時には破壊することで、命を固定的な状態から解放することである。その結果生じる効果は、命の連鎖によって宇宙全体に及ばされるものであって、贈与をした当事者や特定の相手に直接及ぶものではない。しかしすべての命がこの連鎖の中にあるとすれば、贈与を受けるのもまた、われわれであることになる。だから「贈与」は、富める者が貧し

い者へ行う慈善的な行為ではない。それはむしろ「贈与」の本来的な意味に反するものであるとさえ言えるだろう。何故ポトラッチの主催者は、客人の前で自分の財産を焼き尽くして見せたのか、そのことを私たちが理解することは結局困難であるかも知れない。しかし、善意によるものであれ、単に他者に物を与えるということが多くの局面で事態の解決にならないことを、私たちはすでに知っているのである。

（註1）北アメリカ大陸北西沿岸地域の先住民の儀式。多くの財物や食べ物が招かれた客に贈られる他、銅版の破壊が行われ、時には主催者側の家屋に火が放たれた。

（註2）ニューギニア島の東海域にある島々での贈与のしくみ。マリノフスキーは、首飾りと腕輪がそれぞれ島々を逆方向に贈られ、回っていくとした。

（註3）モースが「贈与論」で言及したニュージーランドの先住民の贈り物。この贈り物は自分のものとして所有してはならず、必ず次の相手に贈らなければならない。そうしなければ、害があると信じられていた。

【参考文献】
マルセル・モース「贈与論」、『社会学と人類学1』（有地亨・伊藤昌司・山口俊夫訳）所収、弘文堂、1973.4
マリノフスキー『西太平洋の遠洋航海者』（寺田和夫・増田義郎訳）『世界の名著59』、中央公論社、1972.8
レヴィ＝ストロース『野生の思考』（大橋保夫訳）、みすず書房、1976.3
レヴィ＝ストロース『仮面の道』（山口昌男・渡辺守章訳）、新潮社、1977.8
ジョルジュ・バタイユ「原初の真実」、『神秘／芸術／科学』（山本功訳）所収、二見書房、1973.5
ジョルジュ・バタイユ『純然たる幸福』（酒井健訳）、人文書院、1994.7
ジャン・ボードリヤール『象徴交換と死』（今村仁司・塚原史訳）、ちくま学芸文庫、1992.8
ジャン・ボードリヤール『不可能な交換』（塚原史訳）、紀伊国屋書店、2002.1
嶋田義仁『異次元交換の政治人類学――人類学的思考とは何か』、勁草書房、1993.10
ジャン・フランソワ・リオタール『こどもたちに語るポストモダン』（管啓次郎訳）、ちくま文芸文庫、1998.8
Derrida, Jacques, The gift of death, Trans. David Wills, University of Chicago Press, 1996
Douglas Cole & Ira Chaikin, An iron hand upon the people: the law against the potlatch on the Northwest Coast, The University of Washington Press, 1990

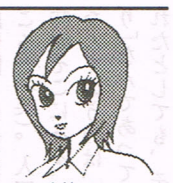
■プロフィール（こはら・まさる）某短大で、コンピュータ・ネットワークのシステム管理を仕事にする傍ら、コンピュータのための（同時に人のための？）音楽の記述方法を思案中。また、NGO活動を経て、ジンバブエの教育関係者との支援のための共同研究に参加して（使われて）いる。

「美」と「判断力批判」

美って何なんだ〜？

ひるます

肥留間氏


珠緒さん

心とは何か？　を探求するマンガ『オムレット』登場人物による対話シリーズ。今回は謎の古書蒐集家・肥留間氏と女子大生・珠緒さんに、「美」について語ってもらいます（古書店・伊丹堂にて）。

珠　緒：こんにちわ〜…って、あれ？　今日は店番誰もいないんですか〜？

肥留間：（本の山の中から出てきて）ああ、珠緒さん、おひさしぶり。

珠　緒：ええっ？　肥留間さんですかっ!?　めずらすぃ…。

肥留間：そうかなぁ…。君たちがこの店でしゃべくってる時に、僕はここの本の山の中で探し物をしてたりしたこともあったんだけど。

珠　緒：またまた…。でもあり得なくもないっ…のがコワかったりして。

肥留間：ふふ、それはともかく、せっかく伊丹堂さんたちがここで『オムレット』での哲学話を発展させてくれてるんだから、その続きをしてみてはど〜かと思うんだけど。

珠　緒：はあ…というと…？

肥留間：まあ『オムレット』では基本的に心とは何かというテーマで科学や哲学を渉猟しながら、けっきょく何やってたかというと「真理」というものを考えてみたわけだ。それが後半から社会の問題になり、その後は伊丹堂が「倫理」や「正義」についての語りを引き受けていったわけだが、ここで何がテーマになってたかといえば「善」だろう（本紙掲載の「倫理って何なんだ〜？」（7号）および「正義って何なんだ〜？」（8号）参照）。「真・善・美」ときたら次は「美」だというのが哲学的思考の常道だ（笑）。

珠　緒：美とは何か？ ですか。…たしかにカントの3批判（純粋理性批判・実践理性批判・判断力批判）もそのまんま「真・善・美」に対応しているわけですよね…。

肥留間：つまりそれはそれぞれ『オムレット1・2・3』に対応するわけだけどね（笑）。

珠　緒：そんなのホントに出るんですか（笑）。それはともかくとして、個人的には「美とは何か」ってのは、興味あります。これまでの「真」とか「善（倫理・正義）」の話からして、だいたい察しはつきますが…。

肥留間：ふうん、ではそれをまとめて言ってみたまえよ。

珠　緒：はあ、ようするに竹田青嗣流に解釈されたプラトン・イデア論ですか（註1）、それにもとづいて伊丹堂さんの倫理論・正義論が語られてましたけど…、ようするに人が物事を把握する際の基底的なヨリドコロということでしょうか。美そのものが存在するのではないけど、美という捉え方のヨリドコロがあってはじめて、人は何かを美しいと捉えたり、人と確認しあったりできる…、そういう共通基盤というか。

肥留間：ふふ、美しさは美しさとしか言い様のない、価値概念ってとこかな。まあ伊丹堂も「それ以上問うことのできない根底」だとかは言ってたね。ただ「真・善・美」と並べてみればそこに「違い」もあるわけで、そういうレベルでは「美とは何か」ということを規定することも可能ではある…ね。

珠　緒：真理や倫理との違いですか…？、簡単に考えれば「感性的」っていうか、感覚的ってことでしょうか。

肥留間：それは単純だね。たとえば美的な行為というのもあるが、必ずしも「感覚」すなわち、五感によって捉えられるものであるわけではない。目に映る姿を美しいと捉えてるわけではない、なんてことがある。あるいは逆に「真」といったものだって、感覚的な事実性に裏付けられていなくては、真と捉えられない。つまり「感覚」というところが必ずしも分岐点というか、メルクマールではないのさ。

珠　緒：たしかに…そう考えてみれば「美」ってのは、ようするに「意味」ですよね。ただそうすると「美」の意味は「美」だということになって、やっぱりそれ以上説明できないような気もします。

肥留間：いや、だからそこで、美の特質は？ ということを思い巡らせたとき、なぜとっさに「感覚」ということが出てきたのか？ ということを逆に考えてみればいいわけさ。

珠　緒：逆に…ああ、つまりそれは美が個別的というか？、ひとそれぞれな感じ方だというところがあるからでしょうか。

肥留間：そういうこと。このまえ「仮面ライダー龍騎」というテレビドラマを見ていたら、ジャーナリストと称する男が「真理は一つだが、正義は一つじゃない」なんてことを言ってたよ。僕らとしては真理とて一つではないのだが…まあそれはおいといて、正義が一つではないなら、さらに美は多様だ、ということになるだろう。

珠　緒：ライダーですか…。でもそうすると、美というのは個人的な価値観の問題ということになるのかしら？

肥留間：個人的ってことの意味が問題だな。そもそも美というのは、自分なり他人や集団なりのなんらかの「尺度」に照らして後に「美しい」と感じるなどというものではなくて、まさにそれを受け取ったその瞬間に「美」がリアルなものとして到来する、そういうもんだろう。

珠　緒：まさに「ヒラメク」わけですよね（笑）。

肥留間：それは感じたその瞬間のリアルさがすべてなのであって、別に「真理」のように検証しなくてはならないってものでもない。森村泰昌さんが美術鑑賞のツボで言ってるように「面白ければ間違っていてもいい」ということだろう（註2）。そういう意味でいえば美は「個人的」なものなのだが…。単純な意味で「個人の中で完結するもの」って意味でならそうではない。

珠　緒：個人の価値観っていっても、時代の文化とか歴史とか、その人の環境の中でつくられてくるわけで、単なる個人的なものではもちろんありえないですよね。美はハビトゥス（註3）として到来するっていうことでしょう。

肥留間：そう…しかしただそれだけだと、個人が美を受け取ってそれで終わりという意味ではそこで完結してしまう。肝心なことは、美がリアルとして到来するものであると同時に、それは我々にとっては「判断」だということなのさ。

珠　緒：というと…？

肥留間：単に美しいと感じるということと、それを美しいと語ること・表明することとの「間」という微妙な問題だな（笑）。

珠　緒：それはまた微妙な…。

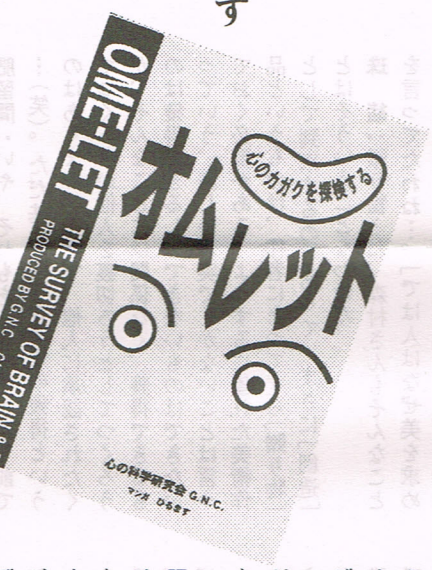
肥留間：そう、現実的にその「間」を分けられるかどうか、ということを問題にしてるわけではないのさ。ただ僕らが美を感じる、美がリアルとして到来する、そのときに僕らの奥底ではそれを「美しい」と語る、語りが駆動する、それを言いたいわけだ。

珠　緒：その語りが「判断」だということになるわけですね…。

肥留間：判断と言っても、安吾にとっての「意識」が「長い時の流れの中でそんなことを考えてみたこともあった」ってものだというのと同じで（註4）、単にちらっと「綺麗だと思った」というレベルから、それを文章にしてみたり、あるいはそこからインスピレーションを得て新たな作品づくりに至る、なんてことのすべてを含んで「判断」といってるわけだ。つまりこれは僕の言う意味での〈コトの創造〉だよ。

珠　緒：リアルの到来とウラハラなものとしてのコトの創造ですか…どこかで聞いたような気もしますが。

肥留間：「*La Vue*」の「倫理って何なんだ〜？」で伊丹堂が言っている。倫理的行為において



は「良心」とでもいうべきリアリティが人格の中心に到来し、それゆえ我々のコトの創造としての倫理的行為が可能になる…とかなんとか。ここは読者から「分かりにくい」という声があったようだが…、つまりリアルが到来することによって行為が起きるのであれば、それは受動的なもの、なにか自動的なものであって、能動的な倫理的行為ではないのでは？　ということになるからだろう。しかし倫理に関する伊丹堂の中心点は「そうしなくてもいい、にもかかわらず、そうする」という実存の問題なわけで、「分からない」という人はそこを取り逃がしているのだ。

珠　緒：…つまり「リアル」というのは「そうしなくてもいいもの」として到来している、ってことですか。

肥留間：当たり前じゃ、と伊丹堂なら言うところだ（笑）。人間が機械ではないことの意味がそこにある。「そうせざるを得なかった」なんていうのは、言ってみれば「後からの語り」なんであって、どんなにリアルに圧倒されたとしても、そこには「そうしなくてもいい」余地が必ずある。そこで美に話をもどせば、美というものは倫理問題以上に「受動的なもの」として考えられやすい。そこでこの「判断」という側面を強調しておきたいわけだ。

珠　緒：なるほどね…それで美を感じることは同時にそれを語る「コトの創造」でもあると…。あ、そうすると、コトの創造ってのは、他者を配慮した文脈の中での語りとか行為だから…。

肥留間：そういう意味で個人では完結しない、と言ったわけだな。

珠　緒：その話でしたね（笑）。個人では完結しない、というか、厳密には「完結してもいい、にもかかわらず」人は語り出す…。

肥留間：そ、美人コンテストの発生問題ってのがそこにある。

珠　緒：は？

肥留間：あれは「美人」を決定するのが目的なのではなくて、ようするにそれぞれが自分の価値観を表明して、それを「どちらがヨリ普遍的なのか？」を競い合ったり摺り合わせたりする行為なわけだね（笑）。

珠　緒：オヤジくさ…。でも芸術家が作品の創造に本気でとりくんでるなんてのは、そうしなくてもいいにもかかわらずって意味で「倫理的」ですよね。結局それは「普遍的なもの」を求めているってことなんでしょうか。

肥留間：美が「判断」である以上、それは「普遍性」を求めざるを得ないのだ。

珠　緒：その場合の「普遍性」ってのは、絶対的な美とは違うと思いますが、どういったらいいんでしょう？

肥留間：「普遍性」というのは、ようするにそのコトガラが、なんらかの「他者において」も、同様な判断が成り立つ、あるいは同様なリアルが到来する可能性を備えるに至るまで洗練されている、ということを指すわけだ。コトの創造が「他者性を配慮する」というのは、そういう可能性をめがけるということなのであって、それ以外のことではないのだ。

珠　緒：あ、他者への配慮ってのはそういうことなんですか。倫理とか美の問題で、それを「他者の承認」を得たいという欲望によって説明する議論がありますけど（註5）、それとはちょっと違うわけですよね…。

肥留間：あれはベタな議論だね。他者の承認というのはもともと宮台真司とか柳美里とかが言い出したんじゃないかと思うが、そういう承認によって自分の確信や尊厳が保たれる、そういうことを目的にして人は生きるっていうわけだ。ま、たしかにそういう風に生きる人もいるだろうし、そう言われればそうかもって意味では思い当たるところもある（笑）。しかし、それだけでは単なる心理的事実の記述？にすぎないだろう。

珠　緒：まあたとえば人を救うために命を犠牲にした人がいて、それを後から他の人が「自分が認められたいからやったんだろう」なんて言ったとしたら、大きなお世話って感じではありますね。

肥留間：ようするに心理的事実の勘ぐりはどうでもいいわけで、伊丹堂が「倫理」を語るときに「そうしなくてもいいにもかかわらず、そうする」というカタチのみを問題にして、動機に関する議論を排除したことの意味はそこにある。実際にその人の行為が「本当の意味で倫理的な動機から出ているか」なんてことは検証不可能だからね。結局、倫理は本人がしなくてもいいのにするという「決断」によってなす、本人にとってのフィクショナルな「意味」でしかないのだ。逆にいえば、自分が認められたいから「いいこと」をした人がいたとして、倫理的にはそれでいいのか？ってことだな。

珠　緒：たしかに…。そういえば伊丹堂さんのいう倫理はむしろ身近な人や世の中の人といった「他者」を「否定」するような否定の運動であるということでしたね。

肥留間：結果として「否定」してしまう、というところがミソだ。ようするにコトの創造ということが、まずあるのであって、そのコトの創造がウラハラに他者＝文脈を立ち上げる、とでもいう結構になっているわけだ。逆にいえば「他者の承認」という議論では、はじめから他者と自分というものが実体として前提されてしまうところがダメなのさ。すでに確固として存在している他者と自分との関係性の遊戯というか物語になってしまうわけだな。そうではなく、キミが『オムレット』第3章でいってるように「自分は後からついてくる」わけだろ。

珠　緒：ヒラメキを語った結果としてカタチづくられてくる、わけですね（註6）。

肥留間：だから、それは他者も自分もいい意味で「裏切る」可能性を常にもっているわけだ。

珠　緒：美についていえば「裏切り」のない作品なんて（笑）つまらない、ともいえますね。でもそういう作品しか「普遍的な美」を持つことはできないというのも皮肉な感じですね。

肥留間：いや、それもある意味で当たり前で…（笑）。ただ基本的に普遍性の獲得というのはあくまで結果論で、他人に承認されたくてつくろうが他人を裏切ろうとしてつくろうが、そんなことには関係なく、獲得できるものは獲得できるし、できないものはできないっていう、厳しい現実でしかないことは言っておく必要がある。ようするに優れた美術作品というものは、作者にとってすら「贈り物」として到来するのであって、まさに「創造」とはそういうことなわけだ。

珠　緒：贈り物…ね、森村さんもそんなことを言ってたわね…。「では人はなぜ美を求めるのか（そうしなくていいにもかかわらず）？」を聞こうと思ってましたが、そこに答えがあるわけですね。

肥留間：動機はどうでもいい、というか関係ないと言ったところだから、おおかたの心理的事実としてはそんなものだろう、と言っておこう。美の創造がコトの創造として普遍性をめがける、ということは、その都度「他者においても」同様なコトの創造が成り立つことが想定されつつコトが創造されるということだ、ってのは前に言ったが、ほとんどの作家というものは、誰か他人にそれを見せて承認されて初めてそれが他人においても妥当するのだと知るのではなくて、制作のまさにその最中にそれが妥当する・普遍的なものであるというコトが彼に到来するわけだろう。

珠　緒：あははっ、出た。ラカンを日本一分かりやすく説明してるのはひるますだというンのいう「黄金数の出現」ってことだろ。「ああっこれだッ」って感じで。これがラカ噂ですよ（註7）。冗談はおいといて、それが贈り物ってことなわけですね。それにくらべればたしかに、実際に人から評価されるってことは、それほどのヨロコビじゃないのかもしれません。

肥留間：まあ実際の評価や承認を気にしないってのも困ったものなのだが、ひとりよがりって意味でね。しかし、アラユル美の追求は普遍性（黄金数）とひとりよがりとのせめぎあいで、どんなに高い評価の芸術も、実はそのスレスレのあわひを漂うはかないものでしかないのかもしれない。

珠　緒：にもかかわらず、美を求めるのが芸術家ですか。世間的には困った人ってイメージになっちゃうと思いますけど。

肥留間：そういう芸術家や予備軍も世の中には必要なのだが…。ただそういう美の追求というのは、美をある種、超越的な、この世のものならぬ？、日常を越えて辿り着く何か、みたいなものとイメージしているわけだけど、今の時代は、美ってものをもっと日常的な、ごく普通に生活に密着したものとして考える必要がある。

珠　緒：美の日常化っていうか？

肥留間：むしろ日常の美化だな。生活にこまごまとした「美しいモノ」をとりいれようということは、まあ経済的な豊かさもあってそこそこに普及していると思うんだが、僕の言うのは、人間としての態度とか人と人との関わり方の中に、もっと「美」ということを意識するようになればいい、ということだ。

珠　緒：マナーとか…。

肥留間：それも含めてね。マナーというと禁煙とかの、ルールを守ってればいいという話になりそうだが、それだけではなくて、いろいろな場面で「良いか悪いか」ではなくて、「美しいかどうか」を意識して行動した方がいいってことがあるような気がするね。というのも、実は人が生活とか人格をつくり出していく上で、大きな位置を占めているのは「真」でも「善」でもなくて「美」だからだってことだよ。

珠　緒：たしかに真実のためとか、正義のため、に人が生きていくわけではないですよね（笑）。

肥留間：それと人が倫理的行為をなしうるのは、それがハビトゥスになっているからだと伊丹堂が言っていたが、そのようなハビトゥスを形成しようとすること自体が、そもそも自分にとっての「美」意識にかなうからだろう。

珠　緒：オトコの美学ってやつ～？

肥留間：矜持ってことだね、男か女かは関係ないので（笑）。フーコーが「主体の様式化」ということを言う時に「倫理的―美学的様式化」という言い方をしているのが、まさに的を射ているのだ。

珠　緒：人格のまとまりをつくりだすのが「美」…。

肥留間：まとまりを様式化するヨリドコロが「美」だというのだ。しかしそのことがあまりにないがしろにされてないか？　ということを問題にしている。つまり世の中で善とか正義ということの大切さというのは、タテマエとしては語られてきてるわけだけど、美についてはタテマエとしてもあまりに語られていない（笑）。

珠　緒：教育の問題ですよね。身体に美と書いて躾、なんちて（笑）。美ってことをもっと意識していれば、「人に迷惑をかけなきゃなにしてもいい」とか、悪徳政治家が法的に問題はないからと開きなおるのって、単に「それって美しくないじゃん」で済みますからね。

肥留間：美ということが公準として意識される、というかね。筒井康隆の『美芸公』ってのがそういう世界を描いたSFなんだけどね。まあただ美がダイジと声高に語るのって、実はちっとも美しくないのだ（笑）。

珠　緒：あはは、たしかに。日本人の美が廃れてしまったとなげくインテリ白髪おばさんみたいですう。

肥留間：右翼のおじさんもいる。いずれにしても「美」ということを語りながら、実は共同体の回復だとか国家の尊厳といかいう別のコトを目的にしているのがダメなんだね。美を語るなら、もっとそれを普遍性に向けて開

オムレット
―心のカガクを探検する―

心の科学研究会G.N.C.／ひるます著
本体1400円　A5判・ISBN4-906493-06-8

心とは何か？ 心はどこにあるのか？ 自分はどこにいるのか？ 人が生きる意味とは何か？ など、一般の人々がふと感じる心についての疑問を、最新の哲学・認知科学・精神医学などの研究成果をふまえ、ストーリィ性のあるマンガによってわかりやすく解説。初心者から専門家まで、幅広く読んでいただける快著!! 斉藤環氏、西垣通氏ら推奨！

発行：広英社
〒170-0013 豊島区東池袋1-31-10-406
TEL:03-3986-4680　FAX:03-3986-4387
発売元：丸善出版事業部

いていってもらわないとね。

珠　緒：それは正義を公共性に開いていかなくては、というのとある意味で同じですよね。ただそれは原理的にひとりよがりに終わる可能性もあるわけで、なかなかそうはいきませんよね…。

肥留間：それもまた倫理と同じで、これは一人ひとりがフォームとして示していく以外ないのさ。美を生活の中で普遍的なものとして開いていくことがレシピとして伝えられてハビトゥスになるまで…。ようするに「文化」にしていくってことだけど。

珠　緒：美の文化ですか…なかなか難しそうですが。

肥留間：まあ人に親切にしたりすることが、良いこととしてではなくて、美しいことだと感じられるような世の中っていうか？、なんかそういうキブンのいいっていうか、まっとうな世の中になればいいなってくらいのコトだよ（笑）。

（註1）竹田青嗣『プラトン入門』（ちくま新書）参照。
（註2）NHK人間講座・森村泰昌「超・美術鑑賞術」（2002年）
（註3）中世哲学から現代を鋭く読み解く山内志朗氏は、『天使の記号学』（岩波書店）、『ぎりぎり合格への論文マニュアル』（平凡社新書）などでハビトゥスの哲学を展開している。ハビトゥスの哲学一般については、ひるますのウェブ「臨場哲学通信」72号参照。
（註4）「意識とは何ほどのものであろうか。流れつつある時間のうちに、そのようなことも考えてみたこともあったというだけのことではないのか」。このフレーズは『オムレット』第三章でも引用した。坂口安吾「女体」（ちくま文庫版全集第4巻）より。
（註5）「La Vue」8号掲載の神名龍子「竹田エロス論と〈他者＝外部〉」など、いわゆる竹田派に見られる議論。ここではふれていないが、竹田現象学（竹田エロス論）の倫理に関する問題点については、「カルチャーレビュー」25号掲載のひるます「資本システムと「倫理」～竹田現象学のアポリア」で全面的に批判を行った。
（註6）ひるます「オムレット」（広英社、1999年）、第3章「自分って何なんだ？」。
（註7）ひるます「オムレット」（広英社、1999年）、第4章の1「囲碁と黄金数」。

■プロフィール（ひるます）岩手県生まれ。マンガ家。単行本『オムレット―心のカガクを探検する―』（広英社刊、1999年）のほか、商業誌掲載作品に「平成大逆転男」「黄昏まで2万マイル」（いずれもコミックモーニング）がある。HP「ひるますホームページ／臨場哲学」で書評・エッセイ・デジタルコミック等を発表中。
http://www.bekkoame.ne.jp/~hirumas/
E-mail：hirumas@cancer.bekkoame.ne.jp

学問論

アカデミズム再考

――三十数年ぶりに大学生となって思い直すこと

元　正章

五十三歳になって、再び大学の門に入った。関西学院大学大学院　神学研究科聖書神学専攻と、学生証に記されている。社会人入学ということもあり、三年間の学生生活を送って、この二月には卒業し、四月からは主任教師として牧会に当ることになる。「イエスの受難と弟子たちの無理解」という題目の修士論文を提出し、ほっとしたところで今この原稿と向き合っている。

思い返せば、あっという間に過ぎ去った三年間であった。ただ真面目に勉強をし続けてきたというだけのことであり、とりたてて語るようなことは何も行っていない。神学の勉強はわたしに向いており、水を得た魚のごとくに生きていた。生活の面では、たしかに苦労の連続でもあったが、それが切羽詰まったものとはならず、その時その時不思議にも与えられてきた。

„なんとかなる"という気持ちは信念にも近く、事実なんとかしてきた。このことはなにも一個人の特例ではなく、多くの人の場合にも当てはまることではなかろうか。たとえ周りの状況は厳しくても、自分の背丈に合った生き方はやろうと思えばやれるということである。

「勝ち組」「負け組」といった区別が昨今なされているが、実にくだらない考え方である。世間の価値観に振り回されないことが大事である。そう、特にこの三年間は、世間の空気に触れずに暮らしてきた。また自分の人生を振り返ってみるに、こと収入の面では「負け組」に属していたし、交友関係もそうした人達が圧倒的に多い。「勝って、なんぼ」の世界で判断されるよりも、勝ち負けに関係なく、「生きて、よかった」と言えれば、それで十分である。

一九六〇年代後半に、東京で学生時代を過ごした。団塊の世代、全共闘世代の典型を生きてきた一人である。大学解体が叫ばれ、産学共同路線反対、プチプル打破など、およそ社会の権威に対しては批判と否定を突きつけてきた時代にあって、大学で全優を取ろうとする者は馬鹿のやることであって、出来る人間は中退するものであるというのが、当時の主流であった。

「アカデミズムなんて、糞喰らえ」であり、大学とは学問の場と主張するような者がいれば、軽蔑されるどころか、まともな人間として交際してもらえなかった。勉強は授業で教えられてやるものではなく、自分らでやるもんだということを体験した。

大学には、権威はなかった。その限りで、アカデミズムは死語であれば、腐語であった。このような„とんでもない世界"で下宿生活を送っていると、足繁く通うところは大学ではなく、ジャズ喫茶であり、映画館であり、古本屋であった。ほとんど授業に出席していないものだから、当然成績は悪い。四年間で卒業できたことが不思議なほどである。試験前そのための勉強した記憶はなく、『カラマーゾフの兄弟』をひたすら読み耽っていた姿が懐かしく思い出される。

かくて卒業後、社会人となることからドロップ・アウトして、ヨーロッパで二年間半過ごす。帰国してからは、本屋に勤め、ここで二十八年間も働いていたのであるから、本屋の人間であるということが身体に染みついてしまっている。こんな男が牧師になろうとしているのであるから、神さまは心寛い。負けて負けてしまった人の方こそ、神さまはより受け容れてくださるということである。

「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」（マルコ2：17）。

卒業を間近に控えて、「若い学生達と一緒に、おじさんはよく頑張ってきましたね」と言われる。そうかしら。おそらく、わたしの方が若かったのではあるまいか。好奇心と研究心は枯れてしまえばお終いである。分からないから勉強するのであって、分からなかったことが分かった時、それはあくまでワン・ステップに過ぎず、後は繰り返しに継ぐ繰り返しであって、要は持続力である。

学問の場合、一定の領域の中で行われるので、その中での集中力が求められる。これが社会の場であると、あれやこれやと付度した上で振る舞わなければならない。時には、しっぺ返しを食らうこともあるだろう。しかし、書物が対象であると、やればやったで報われるのであり、少なくとも裏切られることはない。どこまで徹底して批判できるか、どこまで著者と格闘しえるか、そこだけに向き合っていればいい。もしそこで新鮮さと柔軟さを欠けば、勉強なんてやっておれないであろう。学問の世界に、好況・不況なんて関係ない。それだけに毎日机に向かっていることができたわたしは、幸せ者であった。

ここまでくると、授業をさばるなんてもったいないことであり、休講であれば授業料を返せとなるから、変われば変わるものである。授業のない時は、もっぱら図書館で勉強。「そういえば、早稲田の図書館には一回だけ入ったことがあったな」と、苦笑する。

もっともその結果、院の成績が全優であっても、嬉しくはない。修士論文も含め、色々とレポートを書いたが、どれも満足できるようなものではなかった。これは実力云々以前に、人間としてのいい加減さに起因している。このような人間が宗教家であるとは言えない。

アカデミックには、大学の、学究的なという意味の他に、空論的なという意味も加えられている。大学が象牙の塔と言われるのは、後者の場合が強調されている。現実社会に適応せず、一握りの人達による空理空論を弄ぶ場となろう。であるならば、神学部などはまさにアカデミックの最たるところとなろう。しかし、現実に適合させた学問は厳密には学問ではないのも真実である。

大学教授の肩書きでマスコミに登場して、盛んに時事批評を行う者はタレントではあれ、学者とは言えない。学ぶことの始まりは、空理空論といったようなものである。問題なのは、その空しさをどこまで自覚して、耐えていけるかにあり、そうすることで一つの理論にと結実していく過程が、学問するということである。先人の歩みを辿っていくことで、そこから何かを発見することが、学問の悦びというものである。その際、原典を読むということが基礎作業となる。その困難さと立ち向かうことで、わたしの神学生の日々が営まれた。それだけのことであった。

アカデミズム批判、やるならばやるがいい。しかし、それでアガデミズムは無くなるものではない。尊敬に値する何人

かの学者とも出会えた。神学するとは、気の遠くなるような世界に踏み込むということである。日本の大学はたかだか百数十年の歴史しかない。現時点の価値基準だけで、大学を眺めないことが大切である。このことが、若い時には分からなかった。

アカデミアの由来は、プラトンがアテネ郊外のアカデメイアで学園を開いたことによる。そもそも地名。それから二千数百年の人類の歴史を辿って、今日に至っている。いつの時代であれ、生きるとは哲学するということでもある。大学という機構に捕らわれずに、各人がアカデミックに生きていくことを望みたい。

■プロフィール（はじめ・まさあき）一九四七年神戸生まれの神戸育ち。両親は奄美出身。早稲田を卒業後、二年半パリを中心にヨーロッパを遊学。帰国後、神戸の書店に勤務しつつ、市民活動を行う。十二年前市会議員選挙に立候補して、惨敗。挫折。受洗。この四月から、高砂市の曽根教会に主任教師として赴任。

歌集
死明
富哲世 著
■A5判・和綴・函入・定価一八〇〇円＋税
窓月書房

るな工房／黒猫房／窓月書房
自費出版等のご案内
◎ご希望の造本で製作致します◎
るな工房／黒猫房／窓月書房では、自費出版（詩集・歌集・特装本・限定本・記録集など）から商業出版まで、編集・製作・ＤＴＰ・装幀・デザインなど出版全般のお手伝いを申し受けます。お気軽に、ご相談ください。
■TEL/FAX:06-6320-6426
■大阪市東淀川区菅原7-5-23-702　〒533-0022
■http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/koubou.html

数学

わかるということ……ある数学の体験

加藤正太郎

長い歴史

■「がっかり」

「xが出てきたときに、僕はがっかりしたのを覚えている」

もうずいぶん以前、とある集まりでデカルトの『幾何学』を肴に四方山話をしていたおりに、ある年長の友人は、ふとこう漏らしたのでした。

それは、発見の楽しみだった幾何の問題を、ある種の計算が解いてしまうことへの失望だったはずなのですが、もしかしたら「鶴亀算」の話だったかもしれません。とにかくそんな感性の豊かさや、劇的な授業体験を羨む気持ちが先走っていたのでしょう。その時、ある疑問がふいに思い出されてはいたのですが、それは話題にされることもなく、すっかり忘れ去られてしまったのでした。

長い歴史をかけて発達してきた数学の内容を、なぜ私たちは理解できるのでしょう。幼年の頃には足し算すらおぼつかなかった私たちは、いまでは数字「2003」（位取り記数法）を用いて計算を行い、利子0.2%や打率0.333といった小数をこだわりなく使いこなし、微積分の基本的な方法すら理解することができます。けれども「2003」については、たとえば古代ローマの時代には「MMⅢ」と表記していたのですし【註1】、小数は十六世紀末、微積分にいたっては十七世紀後半にようやく発明されたものなのです。思えば気の遠くなるような時間をかけて発達してきた数学の技法を、現在の私たちは十数歳にして使いこなせるという不思議。それは、何かを教えられたり、自分で考えるときの、あの「わかった！」という感触の由来とつながっているのかもしれません。

「幾何学」

における図形を、紀前半のデカルトによる発明であり【註2】、近代の始まりを告げるパラダイムチェンジとされているのですから、先の「がっかり」は、かつてあった「革命」を体感した少年の存在を、証言しているのではないかとさえ思えてくるのです。

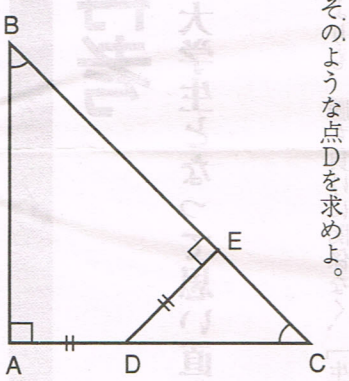
この少年の「がっかり」をいま感じ直し、「わかった！」についての宿題を自分に出しておきたい。そんなことを考えながら、次の例題を二通りの方法で解いてみることにします。

未知量x、yについての方程式で扱う方法」も、十七世

【註1】0を用いる位取り記数法がインドにおいて誕生したのは五世紀頃、ヨーロッパに浸透し始めたのは十二世紀以降と言われています。

【註2】デカルトの独創は、単に幾何の問題を方程式で解くことにあるのではなく、「座標の考え」を導入し、「解析幾何学」を発明したこと（たとえば円は、$x^2+y^2=r^2$で表されるものになった）にあるとされています。

■**例題（中学生用現行教科書から変形して出題）**



角Aが直角である直角二等辺三角形ABCにおいて、辺AC上の点Dから辺BCに垂線DEを下ろすと、AD＝DEとなる。そのような点Dを求めよ。

【註3】デカルトは自身の『幾何学』について、愛弟子であったボヘミア王女エリザベートへの手紙で、（「相似な三角形の辺の比例」と）「ピタゴラスの定理」しか使わなかった、と書いているそうです（これ例題のヒントです）。またデカルトは、王女が幾何の宿題を正しく（自分と同じ方法で）解いていることを誉めちぎり、「厄介な計算を乗り越えるために不可欠な我慢強さ」だけが心配であったとも書いています。

【方法1の解】

角Bの二等分線と辺ACとの交点が求める点Dである（答）。……（ア）

（証明）

三角形ABDと三角形EBDにおいて角ABD＝角EBD、角A＝角E、ゆえに、角ADB＝角EDB……（イ）

一辺BD（共通）とその両端の角が相等しいから（三角形ABDと三角形EBDは合同）、ゆえにAD＝DE。……（ウ）

（少年の使った『原論』の公理と命題（定理））

（ア）命題9「与えられた角を二等分することができる」（コンパスを使って描いたことがある）

（イ）命題32「三角形の内角の和は二直角（180°）に等しい」（知識として覚えていた？）

公理3「等しいものから等しいものが引かれれば残りは等しい」（自明とされていた）

（ウ）命題26「二つの三角形において、二角とその間の辺が相等しいなら、残りの辺も等しい」（頻出する三角形の合同条件）

（方法1）初等幾何の問題として（ユークリッド（前三世紀頃、ギリシャ）の『原論』からの伝統に従って）。

（方法2）AB＝AC＝a（既知）、AD＝x（未知）とおいて方程式を立てる（デカルトに従って【註3】）。

【方法2の解】

AD＝DE＝x（未知）、AC＝a（既知）とおく。……（エ）

三角形EDCも直角二等辺三角形だから、ピタゴラスの定理を使って

$CD^2=x^2+x^2=2x^2$より、$CD=\sqrt{2}x$

ゆえに、$x+\sqrt{2}x=a$（AD＋DC＝AC だから）この方程式を解く。

$(1+\sqrt{2})x=a$と変形し、

両辺を$(1+\sqrt{2})$で割って

$x=a/1+\sqrt{2}=(\sqrt{2}-1)a$……（オ）

これが求めるADの長さである（Aからこの距離にあるのが点D）（答）。……（カ）

幾何が得意だった少年は、角Bの二等分線を「わかった！」という悦びとともに発見したのでしょう。ところが（方法2）については、決められた作業を行うかのような気分にとらわれたのかもしれません（それに$(\sqrt{2}-1)a$と言われても、それはいったい何処のことだ？）。

■**『原論』についてのあれこれ**

ところで、数学における証明は、（与えられた）「定義」と「公理」（及びそれらから得られた「定理」）を前提に進められるものなのですから、『原論』におけるそれらを確認しておきましょう。

「定義」

（1）点とは部分を持たないものである。

（3）点は線の端である。

（4）直線とは、その上にある点について、一様に横たわる線である。

「公準」（これも「公理」と解されます）

（1）任意の点から任意の点へ直線を引くこと。

（3）任意の点と距離（半径）とをもって円を描くこと。

「公理」

（1）同じものに等しいものはまた互いに等しい。

（8）全体は部分より大きい。

さて、どんなふうに感じられたでしょう。それは「定義」ですから、まずは受け入れるしかないのですが（それに『原論』のそれは命題の証明には使われないという意味で、暗示的な記述に過ぎないとも言われているのですが）、いきなり（1）「部分を持たない（大きさがない）」と言われてもどうイメージしていいのか分からないし（大きさのない「もの」って？）、（4）については、なぜ「直線は点の集まり」としないのか（「ついて、横たわる」って？）、という疑問がわいてきます。

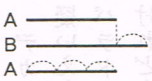
そして実はこれらのことには、先の例題が深く関係していたとされているのです。つまり「点に大きさがある」とするとある難題（辺ABで辺BCの長さを測ることが出来ない）が持ち上がってしまい【註4】、そしてその難題が「無理数」（例えば先の√2：この記号の発明は十六世紀）の発見や（諸説あります）、間接証明（背理法）の導入をもたらしたとも言われています【註5】。

また、『原論』へのゼノン（前五世紀頃、「アキレスと亀」や「飛ぶ矢は飛ばない」のパラドクスで有名）の影響を見る立場からは、「定義」（4）や「公理」（8）について次のような説明がされています。つまり、（ア）「直線は（大きさを持たない）点の集まり」だとすれば、直線は「無限個の点の集まり」となるはずですが、（イ）ゼノンは、「（無限個の点の集まりである）線分全体とその部分は等しい」ことを示してしまった（つまり公理（8）は自明ではない）【註6】、だから（ウ）それを避けて（「全体は部分より大きい」という経験的真理を定式化するために）、「直線は点の集まり」とはしなかったのだ、という主張です。

『原論』の注釈を書いたプロクロス（五世紀）という人は、「線は点の流れである」と述べて、こう書いているそうです。「しかし、……部分を持たないものがいかに運動しうるか……という問題によってなんぴとかが難問を提出しようとすれば、われわれはその人にあまり悩まないようにお願いしたい」。

これらの「歴史」を知った少年は、何か土台が揺らぐような不安を覚えたでしょうか。あるいは定規とコンパスによる作図が、その不安を取り払ったのかもしれません。それともこれらの図形たちは、経験に先立つようなかたちで、彼の心に確かに到来するものだったのでしょうか。あるいは少年は問題を解きながら、その「正しさ」を生き生きと体験し直していたのかもしれません。

【註4】「万物は数（自然数）である」（ピタゴラス（前六世紀頃）の言葉として有名）なら、「線分は大きさを持つ有限個の点からなる」（数珠をつないだような）と考えられます。そして二つの線分の長さは、次のAとBのように自然数の比で表されるはずです。



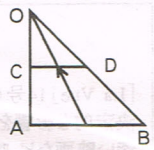
Aで B を測ると余りがあった。
その余りでAを測ると三つ分だった。
だから、A：B＝3：4（A＝1とするとB＝4／3（有理数））
ところが、先の例題の辺BCを辺AB で測ろうとすると「無限」に突き当たってしまうのです。

（1）ABでBCを測ると余りはEC。
（2）ECでABを測るかわりにAC（AB＝AC だから）を測ろうとすると
（3）（EC＝ADだから）ECでDCを測らなければならなくなる。
（4）ところが三角形EDCも直角二等辺三角形（ABCと相似な）だから、
（5）（4）の作業は（1）の作業と同じことになってしまう。
（6）つまり、この作業は永遠に終わらない（AB：BCは自然数の比で表せない）。

ですから、AB＝1とすると、BC＝1.4142…と（現在の表現では）「非循環無限小数」になってしまうのです（これが無理量（数）と言われるものでした）。

【註5】辺BCが「無理量」であることの背理法による証明【註4】のような「無限」を避ける？）は高校で習ったかもしれません。また、プラトンは背理法を多用していますが、たとえば「知識と感覚は異なる」（『テアイテトス』）の証明は次のようなものでした（この説明では満足できないとされるのですが）。「知識と感覚は同じ」と（仮定）する。→「知識は視覚と同じ」→「人があるものを記憶している場合、（ア）その人はそれを知っている（記憶しているから）、かつ、（イ）それを知らない（それをいま見ていないのだから「知識と感覚は同じ」という仮定により）」→「人があるものを知っていて、かつ、知らない」これは不可能（矛盾）。ゆえに「知識と感覚は異なる」。

【註6】アルパッド・サボー氏は『数学のあけぼの』の中で、ゼノンが示したのは、上図のようにAB（全体）上のすべての点にCD（部分）上の点が「一対一対応」すること、だったとしています。



■**デカルトの方法**

（1）注意ぶかく速断と偏見を避けること、そしてもの以外は何も判断のなかに含めないこと（「明証性」）。
（2）検討する難問を、できるだけ多くの、しかも必要なだけの小部分に分割すること（「分析」）。
（3）思考を順序に従って導くこと。最も単純なものから始めて最も複雑なものの認識にまで至ること（「総合」）。
（4）すべての場合に、完全な枚挙と全体にわたる見直しをして、何も見落とさなかったと確信すること（「枚挙」）。

デカルトは、「人の理性を正しく導き、諸学問において真理を探究する方法」として右の四つをあげていました（『方法序説』（一六三七年）はその試みとしての『屈折光学』『気象学』『幾何学』の序論として書かれたものでした）。

そしてこれら（すべての学問のための）「四規則」は、次の三つの学問から（その欠点を免れて）得られたものだと言います。つまり「既知のことを他人に説明」するのに役立つだけの論理学、「つねに図形の考察に縛りつけられているので、知性を働かせると、想像力をひどく疲れさせてしまう」幾何学、そして「ある種の規則とある種の記号にやたらにとらわれてきたので、精神を培う学問どころか、……錯雑で不明瞭な術になってしまった」代数学です。

そして数学（天文学や光学を含む）においては、対象がもつ関係を「線」で捉えて（「線以上に判明なもの」はないから）、それを「ある種の記号で示す」のだと言います【註7】。

方法の実践となる『幾何学』の最初の部分には、次のように書かれていました。

「何らかの問題を解こうとする場合、まず、それがすでに解かれたものと見なし、未知の線もそれ以外の線も……必要と思われるすべての線に名を与えるべきである。次に、これら既知の線と未知の線の間に何の区別も設けずに、……最も自然に示すような順序に従って……、或る同一の量をふたつの仕方であらわす……この最後のものは方程式と呼ばれる」

「枚挙」や「総合」の意味するものについて、また「四規則」と『幾何学』との関係について様々な議論があるようです。『方法序説を読む』の山田弘明氏も、『幾何学』においてはどれが「総合」や「枚挙」の手続きなのか容易に取り出すことはできない、と指摘しています。けれどもここではやや強引に、「四規則」と先の【方法2の解】を（『幾何学』全体とではなく、それにもちろんデカルトはこんな「単純な」問題を扱っているわけではありませんが）次のように関連づけてみましょう。

（1）「判明」なものは「線」である。だから問題は線分ADの長さを求めることである。……（カ）
（2）AD＝ED＝x、AC＝aとおく、……（エ）
（3）CD＝√2x を求め、AD＋DC＝ACから方程式を立て、解いていく。……（オ）
（4）全体を見直して「正しい」という確信を得る。

こうしてみると「枚挙」には、「分析」におけるデータ収集や「総合」における推論の確認だけではなく、問題を解いたときの「感じ方」が含まれているように思えてきます。（3）の方程式を解く過程は、全体像をいったん忘れた（「我慢強さ」を求められる）「機械的」なものですが、解に至った後に自分が「いったい何をした」のか納得できなければ、「何も見落とさなかった」ことも「確信」できないでしょう【註8】。

デカルトにとって代数学は、「精神を培う学問」であるべきものでした。

（1）は「懐疑」によって見出した「考える存在」と同じく、最も「判明」なものとしての「線」の発見、（2）と（3）は幾何学と代数学からの「解析」（「解かれたものと見なす」ことから始める方法）と「推論の連鎖」の抽出と考えられるのですが、（4）は、「訓練」によって得られるはずの（そして自らの方法への）「確信」と読むこともできるのではないかと思うのです。

高校数学までの内容のほとんどは十七、十八世紀に作られたものですから（『幾何学』の方程式の立て方には聞き覚えがあるのではないでしょうか）、それを習った私たちにデカルトの「確信」が自然に思えるのも当然なのかもしれません。

それともやはり、このとき発明されたものは、デカルトが自信を持っていたように、その規則を守りさえすれば「誰も」が正解に至ることのできる方法だったからでしょうか（（方法1）における少年は、いったいどのようにしてあの二等分線を発見したのでしょう？）。

【註7】アラビアからもたらされた代数学によって、十六世紀には賞金を賭けた「試合」が行われたといいますが、その方程式はたとえば「立方体と辺の6倍との和を20に等しくせよ」と言葉で書かれていました（その後アルファベットを導入したヴィエトにおいてもそれは「1C＋6N aeq. 20」だったのです）。デカルトは x^2 や x^3 もxと同じく線の長さ（1：x＝x：x^2 などの比を持つ）であるとして、これらを「面積」や「体積」から切り離し、「x^3＋6x＝20」（3以外は現在と同じ表現）と書きます。デカルトには「代数学がとらわれてきた規則や記号」を一掃したという自負があったに違いありません。

【註8】『精神指導の規則』（一六二八年頃）には、推論の全体を「枚挙」によって同時に把握できるようにならなければならない、という意味のことが書かれていました。また、数学者ジャック・アダマール氏は『数学における発明の心理』の中で、「数学上の議論はたとえ複雑なものであっても、必ず一つのものとして映る。それを一つのまとまった概念として捉えることのできないうちは、それを理解したという感じがしない」と述べていますが、デカルトも同じことを意識していたのではないかと思うのです。

■**「わかった」**

ここまで、無理数の「発見」やデカルトの「発明」と書きながら、かすかなひっかかりを覚えてもきました。

たとえばギリシャにおける「民主制」が、「説得術」（約束事から順に説明を組み立てる）としての「幾何学」を「発明」させた、とはよく指摘されるところですし、デカルトの「記号」にしても、「封建制の崩壊」や「貨幣経済の浸透」と切り離しては考えられないのでしょう（重さを「線」（目盛り）に変換する秤のように、それは質の量への変換を意味するでしょう）。

『数はどこから来たのか』のエンリーコ・ジュスティ氏は、数学は、自然主義（円は自然界にある「だいたい丸い」ものの理念化）や、形式主義（定義と公理を自由に操って自分自身の宇宙を創造する）や、「素朴な」プラトン主義（数学は何らかの客観的実在に関わる）の論者の言うようなものではなく、それは「人間の操作」を形式化するもの、つまり「数学は技芸の娘」なのだと言っています。そして『原論』の「定義」（3）（4）は「杭」と「ピンと張られた（張力一定の）綱」からの、「公準」（1）や（3）は、まさに作業からの翻訳（その後に「点」や「直線」が幾何学の対象となる）と述べていました。だとしたらデカルトの『解析幾何学』も、やはり「発明」と言うべきものなのでしょう（それは曲線＝方程式という「新たな」対象を生み出したのですから）。

ほぼ同じ立場にあると思われる大澤真幸氏も、数学の対象は、音楽にとっての音（音楽的操作＝演奏において初めて対象となる）のようなものであり、それが「既在していたかの如くに産出される」ことがプラトン主義的な数学理解を促す（ことに留意すべき）、と書いていました（『恋愛の不可能性について』）。

けれども（だから？）やはり、（点や直線や）無理数の「発明」と書いたのでは、しっくりこない感じが残ってしまいます（操作や方法は「発明」されるのだとしても）。音楽にとっての「音」が「発明」される以前にも、その音自体はあった（たとえば騒音として？）という意味でなら、その数もあったのではないか、と言ってみたくなってきます。ですから、この「しっくりこない感じ」は、それが「どこ」にあるのかに（ジュスティ氏の言うように人間の行為の中に？、あるいは結局のところは自然界に？）関わるのかもしれません。それに、「発見」という考えを拒みたいときにはいつも、すでに知っていることをいま忘れるかのようなためらいが、まつわりついてきます。

デカルトが、あの有名な「私は考える、ゆえに私は存在する」に続けて、「考えるためには存在しなければならない」（を明晰にわかっていることがそれを保証する）と書いているのを読んだときの、堂々巡りのような、元も子もないような「がっかり」を思い出します。けれどもデカルトは、「考えるものは存在する」を前提にして「私は考える」ゆえに「私は存在する」と結論するような（三段論法的な）理解を、強く拒否しているようです。後から見ると（あるいは「既知のことを他人に説明」しようとすると）そう言わざるをえないだけで、「私は存在する」が先に直観されるのだと。

デカルトの「私」を、「「すべてを疑う」疑いえない私」と理解すれば、古来からのパラドクスが指摘されもするでしょう。けれども「判明」な「線」が、無限の問いである無理数「について」も「横たわ」っているように、「考える私」はそんな指摘などもろともせずに、「発見」されたかのようです。「線」による「誰にでもわかる」方法は、現在から見れば「近代」を告げる発明と思わざるをえないものですが、それを発見する「私」は、時代を超えて存在する、などと書くと、また最初の「ひっかかり」に戻ってしまうのですけれども。

少年は、いつかの時代にか、どこか遠くのところに、自分と同じ人間がいるのではないだろうか、いるとしたらその人間は、この自分のように自分のことを考えているのか、といった疑いを持ちつつも、自分というものについての説明を拒みながら、存在しているのかもしれません。

ふたたび大澤真幸氏によれば、どのような教育も最後には「以下同様」とつけ加えるをえず、それは「以下同様……」の「……」の「わかる」に賭けられていて、人は、それを「わかっている」はずの存在の、「先取り」によってしか「わかる」ことができない、と指摘されることになるでしょう（『性愛と資本主義』）。

「以下同様」の「以前」を人は結局「訓練」によってしか学びえず、そして結局人はひとりでは生きることができないということが、「……」を「わからせる」のかもしれません。けれども（だから？）、「考える私」にとってのその「わかる」は、ある不思議な接触として到来するしかないもののようです。

「（数学が）わからない」と言う生徒たちはときに、「「何がわからない」かわからない」とさらに訴えてきます。けれども「がっかり」した少年は、「（それが誰にでもわかるらしいことは）わかった」のだとは言えるでしょう。

真の順序に従うこともなく、完全な枚挙もないままの宿題もまた、四方山話になってしまいました。

■プロフィール■（かとう・しょうたろう）高校教員。

■原稿募集■

特集＜映画多彩＞

「La Vue」14号（03/08/01発行）では、いわゆる「名画」とは限らない、私にとって決定的な影響を与えた映画や想い出深い映画、あなたのお薦めの映画、印象深い映画など、映画の特集を掲載します。そこで本紙読者の皆様に、上記のテーマで広く原稿を募集します。

「投稿規定」
- ■採用の可否は、編集部一任です（原稿は返却いたしません）。
- ■本紙14号と「カルチャー・レヴュー」にて掲載します。
- ■掲載紙を10部進呈します。
- ■原稿締切：03/05/15、字数2000字前後。
- ■入稿形態：原則メール入稿（郵送も可）
- ■原稿送付先：るな工房／窓月書房 編集部
  〒533-0022 大阪市東淀川区菅原7-5-23-702
  TEL/FAX:06-6320-6426　E-mail:YIJ00302@nifty.ne.jp

■編集後記

★本号の加藤正太郎氏「わかるということ……ある数学の体験」を読んで「分からない」ということばが思い起こされた。はっきりいって内容がまるでわからなかったからだ。定義や公理や定理が頭に入っていないので細かい議論がまったく理解できなかった。しかし、加藤氏論稿の冒頭部分「xが出てきたときに、僕はがっかりしたのを覚えている」と言った友人の話を引き合いに、「発見の楽しみだった幾何の問題を、ある種の計算が解いてしまうことへの失望」を語る部分に興味を覚えた。

★そこで、「分からない」ということに若干思いを馳せてみる。人間と人間の関係で、いちばんたいせつなのは「なんだか分からない」ということなのだとは、前号でも引用した内田樹氏のことば。先生役の内田氏と女子学生の掛け合いが軽妙な雑誌連載での最終回「「他者」とは何か？　の不可能な問い、について」（「街場の現代思想」内田樹、「Meets Rejional」No.178, 2003, 04）の中で、「コミュニケーションを動機づけるのは「分かり合う」ことじゃないんだよ。「分からない」ということなのさ。「そうなんですか…」。「分からない」赤ん坊には自分の前でにこにこしている人が「誰」だか分からない。（中略）でも、ここにはいかなる知的了解もないにもかかわらず、ふたりをつなぐものがある。」とウチダセンセーが言うと自然と「分かった」様子のジョシガクセーは、間髪を入れず「愛？」と答える。

★このように「分からない」ことが人間関係の揺ぎない起点になるべきなのだ、というかんがえに触れたときムーンライダーズの「HAPPY/BULUES ·95」という曲を思いだした。「ぼくの考える億万時間は／きみの感じてる一瞬／違いがあるよぼくら／気にすることはないよ／これが愛」という魅力的な歌詞と、分子がブルーで、分母がハッピーという意味の素敵なタイトルをもつ曲では、十全な相互理解（つまり「分かった」）を基礎に置かない「愛」が歌われている。全部わかってる愛って苦しいし、おもしろくないハズだ。（山口）

★寺田操氏の原稿を読んで「まさしく「声に出して読みたい」と思わせるテキスト」という感想には共感する。私自身音読することがあるからだ。音読することによって、『死霊』の呪文がとけたという感想も面白い。あの埴谷の文体は、もともと大仰というか、かぶいている感じだから劇画的なんだと思う。

★また「私はいつからか自身の読書に関して気づいたことがある。それは、書物を黙読しているのだが、いつも声にならないかすかな声で小さくつぶやくように朗読していることを」この感じも、よくわかる。私も、言葉を刻むように音にならない音読をしているからだ。発声になった言葉を空気を振動させて外から聞くのではなく、黙読する声こそが〈内語としての私語〉の本質のように思う。

★その埴谷の『死霊』が講談社学芸文庫として再刊された。その2巻の解説で鶴見俊輔氏は「六十年前、はじめてこの作品に出会ったとき、『死霊』は、私にとって、とらえようのない作品だった。長い年月をへて、ふりかえってみると、『死霊』でくりひろげられた妄想の中に私自身が二つの浮島としてあるという感想をもつ」と書いている。老哲学者にして「浮島」という言葉は両義的で重いなあ。いま話題の『〈帝国〉』の共著者アントニオ・ネグリ氏は鶴見氏より少し若い70歳だが、鶴見‐吉本隆明を横断して〈帝国〉の「multitudeの可能性」を考えてみることは現在的課題のように思う。（黒猫房主）

■本紙は●哲学／思想●文学●詩●映画●ダンス●演劇●音楽●アート●コミック●生活●医療福祉●教育●スポーツ●インターネット●フェミニズム●セクシュアリティ●出版などをテーマに、思想・文化情況の〈現在形〉を各執筆者のトポス＝視点から批判＝論評を試みます。そして表現を通して「他者」との交差、あるいは「視座」の交換＝相互性を志向します。
また本紙は、ウェブマガジン『カルチャー・レヴュー』とリンクしておりますので、併せてお読みください。

■本紙への感想・投稿・叱咤・激励・投げ銭・木戸銭など、熱烈歓迎。

■謹告　皆様のご支援をもちまして、お陰様で本紙は3周年を迎えました。改めてお礼申し上げます。今後の紙面のより一層の充実を目指すべく来期より刊行回数を年3回（4月・8月・12月）に変更いたします。それに伴い木戸銭も600円に改定いたしましたので、より一層のご支援のほどお願い申し上げます。

本紙支援会員募集

本紙は、京阪神地区の主要書店（一部東京）・図書館・文化センター等に配布し、配布状況は順次ウェヴ（http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe.lavue.html）に掲載しております。
本紙は、市民の相互批評を目指す媒体として、読者の方々の「投げ銭」及び「木戸銭」というパトロンシップによって、非営利的に発行しております。頒価100円は、読者の方々の「投げ銭」の目安です。
また、本紙を安定的に発行するために、支援会員を募っております。年会費一口600円（13号～15号までの定期購読料＋送料＋投げ銭）からの「木戸銭」を申し受けております。
■「投げ銭」「木戸銭」は、切手にても承ります。
■ 郵便振替：「るな工房」00920−9−114321

La Vue ラ・ヴュー
■「La Vue」No.13 ■発行日：2003/04/01 ■頒価：100円（税込） ■編集委員：いのうえ なおこ・小原まさる・加藤正太郎・田中俊英・山口秀也・山本繁樹
■製作・デザイン：いのうえ なおこ　■発行人：山本繁樹　■郵便振替：「るな工房」00920-9-114321
■発行所：るな工房／黒猫房／窓月書房 ©　大阪市東淀川区菅原7-5-23-702 〒533-0022　TEL/FAX 06-6320-6426
E-mail:YIJ00302@nifty.ne.jp　http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/index.html　■協賛：哲学的腹ぺこ塾
■後援：ヒントブックス http://homepage1.nifty.com/hint-yf/　■印刷所：日本データネット株式会社